

藤村二題

高田 友

(一)

「初音ミク」「巡音ルカ」なる歌手を御存知にて候哉。いづれも實在人物には無之、コンピュータにて開發したる音聲にて歌ふインタネット上の女性にて候。歌の巧みにて候儀、現身の歌手の比には無之、何ぞ況んや A K B の如き小學生並の歌と同斷に論ずるをや。非實在とは申す條、姿形を具へ、世の若者の中にはファン尠からずとの由にて候。

始めにデビュー致し候は初音ミク。畫像は A K B を彷彿せしめて候へど、あらゆるジャンルの歌を見事に歌ひて候。軍歌さへ巧みに歌ひ、就中「軍艦マーチ」の調べは絶讚に價すと申すべく候。

一方の「巡音ルカ」は、初音ミクに對抗して候や、廿代後半の美女にして、落着きたる風情あり、歌の調べも靜かにて候。

島崎藤村の「初戀」は人口に膾炙せる詩にて候へども、これに曲ありて、著名なる歌手の歌ひて候。原文は四聯から成るも、インタネットに流るるはおほむね三番迄。

さて、「巡音ルカ」も「初戀」を歌ふ。ここに四番までありて、入興尋常にては候はず。

林檎畑の樹の下に おのづから成る細道は

誰が踏みそめし形見ぞと 問ひたまふこそ戀しけれ

ルカの「樹の下に」を「このしたに」と歌ふ、いささか疑念有之。藤村の詩にはルジなきによりて、詩人のいかに思ひて候ひしかを付度するや容易ならず。しかれども、我が推察は「このもとに」にて候。「樹」を「き」と讀み候へば「下」は「した」、「こ」と讀めば「もと」ならん。すなはち「きのした」または「このもと」ならんと思はれて候。格別の理あるには無之候とは申す條、源三位頼政も「このもとに榎を拾ひて世をわたるかな」(千載)と詠みて候。

一方、「問ひたまふこそ」を如何に讀み候べしやは、文語音讀法の根幹にかかはる大問題なるによりて、諸兄に借問せんとする所御座候。通例、かの惡むべき亡國の「現代假名遣」にては、「といたまう」と表記仕り候へども、文語なるによりて、「アウ」は「オー」と讀むべし。さて、ルカはこれに「といたもウーこそ」と「ウ」の長音にて歌ひて候。「といたもオーこそ」と「オ」の長音たるべきには候はずや。

つねづね「歌ふ」は「ウタウ」に無之、「ウトー」と讀むべく候といふが我が持論なり。「くはぶ(加)」は kuhahu のハ行轉呼音にて候ひ、「kuwau」になり候はめど、wau は [o:] ([o:]にあらず)と長音に化して候に據り、畢竟 [kuo:] となりて畢んぬべし。片假名表記をすれば「クオー」にて候。因みに、「憂ふ」は [urehu] の h 脱落して [ureuj] 而して [eu] (エウ) は「ヨー」と化して候へば、すなはち「ウリヨ」^{ほかこれなくそ}と發音するの外無之候。

戦前の正統なる文語音讀の録音の残り候は、昭和大帝の「終戦の詔敕」の玉音盤にて候。大帝は見事、「信義を世界に失ふ(ウシノオ)が如きは朕最も之を戒む」と仰せられて候。「ウシナウ」にも「ウシノウ」にも無之候て、「ウシノオ」に候。

「玉音放送」を手本として、文語音讀法を確立仕るべく候と存じ候。

(二)

「初戀」冒頭はかく歌ひて候。

まだ揚げそめし前髪の

林檎の下に見えしとき

前に刺したる花櫛の

花ある君と思ひけり

それがし、若輩にて候といへども、文豪の名作に納得せざるの儀有之、今試みにこれに添削を施さんと存じ候。

第一に、「まだ」は口語にして、文語詩には不適切といふ外無之候。「今に及びてその儀に及ばず」の「今だに」の縮まりて候へども、「まだ」と化したるは江戸の世にて候へば、正統文語文に用ゐるは好ましからず。由つて、削除仕り候。

第二に、「揚げそめし」の「し」に疑義有之候。さは「過去の助動詞『き』の連體形」なるは言ふに及ばず候といへども、「き」は英語の過去完了に似て、地の文過去にて候へば、その時點に於て、すでに過去となりたるを示すを其の語法として候。しかるに、ここに言ふ「揚げそめし」は、「今、髪を揚げたるのみにて、その初々しきに胸躍る」の心を言へるなるべく候。怕るらくは、髪を揚げたる姿を始めて目にして候ふらん。これをしも「上げそめし」と言はんには、「すでに前にその上げたるを見たりども」のニュアンスありて、新鮮味の失はるるに候はずや。「き」にあらずして、「たり」「けり」を用ゐん方宜しかるべし。

第三に、「見えし時」の「し」も「揚げそめし」と同じく馴染み難く候。そもそも、「時」の前に「し」の來り候條、爰許諾ふを得ず。女の現れ候以前にすでに見て候ひしが如くにて、理を盡さずといはざるべけんや。「見えたる時」の方よからん。今、能動にして、「見てし時」と致し候はんと思へども如何なりや。「て」と「し」を重ねれば、「て」によりて、「し」の弱まりて、かくのごとき論理矛盾の生ずるなからんとぞ思ひて候。

第四に「前に刺したる」に不満あり。寧ろ、櫛は「刺す」に定まりて、「着く」にも「切る」にも「穿つ」にも無之候へば、あへて言ふの要なし。「前に耀ふ」とする方よからん。さらに「前髪」と「前に」と「前」の二つ見え候は冗漫なる反復にて候との謗りを免れず、かくして「彩に耀ふ花櫛」の修正を試みて候。

第五に、「花ある君と思ひけり」は平板の極み。就中「思ひけり」は主觀的に候て、作者の思ひて候のみなれば、何爲解語の花を讚ふるに足らんや。「花ある君と知られけり」とすれば客觀性を帶ぶるにあらずや。ただ、古歌に「時雨や紛ふ我が袖に」（新古今）とあるに倣ひて、「花かも紛ふ君なりき」と敢へて全面改訂を斷行仕りて候。「紛ふ」は「マガウ」にあらずして「マゴオ」たるべし。

いでや、左のごとくに改作せん。藤村先生、卑賤の平成人の蠅螂之斧を眞に受けたまふなく、ただ泉下に笑はせたまへかし。

揚げそめにける前髪を

林檎の下に見てしとき

彩に耀ふ花櫛の

花かも紛ふ君なりき

（平成二十九年九月十日受附）